
輪廻の鎖 改訂版

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の鎖 改訂版

【Nコード】

N3249BA

【作者名】

白銀

【あらすじ】

織部真冬はとある夢を見た。それは失い続ける夢。その夢はまるで自らが体験したかのように生々しく、真冬に恐怖と絶望を伝える。それでも真冬は抗う事を決意する。守りたいと願う少女のために。

「のべぷろ！」に掲載済みの作品です

プロローグ（前書き）

先に投稿した「輪廻の鎖」の改訂版です。

改訂前の作品と登場するキャラの名前は同じですが、中身は別物です。改訂前の作品を読んでいなくても読めますので、未読の方はこちらからでも読んでみてください。

プロローグ

輪廻の鎖 改訂版

プロローグ

長い夢を見ていた。

それは失い続ける夢。自らを縛る運命の鎖に抗い続けた織部真冬という名の少年の夢だった。

（彼はどうして……そこまで出来た？）

夢を見た少年は問う。

だが、答えは返ってこない。所詮は夢の中の出来事なのだから。

それでも少年は見続けた夢から思考を切り離す事が出来ないでいる。その夢がまるで自らが体験したかのように生々しかったからである。織部真冬と同じように恐怖し、憤り、嘆き続けてきたのだから当然といえば当然だろう。それを証明するかのように、今でも少年の全身を恐怖が襲い震える手は止まる事はない。

（もう終わったのに。終わったんだ！）

少年は自らに覆い被さる布団を強引に跳ね除けて、部屋の外に向けて駆け出していく。まるで全身を襲う恐怖から逃れるかのように数秒の時間をかけて飛び出した先には少年が求める妹の姿があった。

（これが現実なんだ）

少年は安堵の息を吐く。それと共に実感する。もう縛られてなんかいないのだという事を。

彼が。織部真冬が断ち切ってくれたのだと。

「どうしたの？ 顔、真っ青だよ」

妹は部屋へと駆け込んで来た少年に驚き一瞬だけ目を見開いたが、すぐさま心配して少年の顔を覗き込んでくる。

そんな妹の手を少年は強く引いて抱き寄せる。織部真冬が望んだように。

これは前世の想いなのだろう。
だが、それでも良かった。

（俺はこれからも歩んでいけるから）

心の中でつぶやき抱きしめる腕にさらに力を込める。伝わってきたのは柔らかさと確かな温もりだった。彼女は確かにここにいて、今もこうして抱きしめていられる。少年にはただそれだけでいいのである。

「本当にどうしたの？」

「辛い夢を見たんだ」

問う妹に応える少年。また何か問われるかと思ったが妹は納得したように一つ頷く。

「僕も見ただよ。でも、あれは僕達ではないんだ。だから——」

「彼らの分まで幸せになろう」

妹の言葉を遮って少年は言い切る。彼らが望むであろう生き方を全力で貫くために。

「うん。二人で幸せになろう」

頬を朱色に染めて首肯する妹。その言葉だけで少年の心は徐々に解放されていく。心を満たしたのは言葉には出来ない至福だった。

「その前に皆に会いに行こう。彼らも自由になっただろうから」

少年は妹の手を引いて歩き出す。前世の彼ではなく、自らの道を歩むために。彼らの分まで幸せを掴み取るために。

もう自らを縛る鎖はないのだから。

第一話 前編

— 前編 —

「真冬！ 寒いからって二度寝は駄目だよ」

定期的な振動と共に聞こえてくるのは幼さを感じさせる少女の声。

（もう朝か？）

真冬はうつすらと瞳を開ける。

予想通り自らを揺すっていたのは妹の春だった。真冬と同じ艶やかな黒髪をセミロングに伸ばし、一歳しか離れていないのだが、中学生くらいに見えてしまう童顔の少女である。

すでに準備を終えているのか高校指定の濃いグレーのブレザーに、濃淡グレーのチェックスカートを身に纏い、残りの仕事は兄の世話のみと言いたげな顔をしている。

（良かった。生きてた）

妹の姿を瞳に焼き付けた真冬は再び瞳を閉じかけていく。今ならばものの数秒で再び眠りにつけるような気がする。

「もう！ 早く起きないと遅刻するよ」

起きない真冬を見て妹が頬を膨らませる。その姿はどこか子供っぽくて自然と頬が緩んでしまう。この可愛さを目の当たりにすれば、眠気などすぐにでも吹き飛んでしまうというものである。

「起きるか」

真冬はようやく自らを包んでいる布団を両手で押しのけて半身を起す。

次の瞬間。

起き上がるのを待っていたと言わんばかりに妹は真冬の腕を掴み全力で引っ張っていく。

「おっと」

「早く起きる！」

春は真冬がバランスを整える間もなく、寝起きで動きが鈍っているという事などお構いなしの様子である。

そんな姿に苦笑した真冬は――

「分かったよ」

つぶやくと共に二段ベッドの一段目から身を乗り出す。

床には防寒用のカーペットが敷かれているが電源がついていないのかさほど温かくはなかった。むしろ早朝の冷えた空気が容赦なく真冬の素足を冷やし、鈍った頭は徐々に覚醒していく。

「早く着替えてね。外で待ってるから」

ようやく目覚めた真冬に妹はうつすらと微笑み部屋の外へと向けてゆつくりと歩を進める。

春はとりあえず朝の役目を終えたと言わんばかりの様子ではあるが、真冬にもやるべき事が一つある。

そのやるべき事を成すために素早く左手を伸ばし、病人のように細い左腕を掴み引き寄せて――

「熱はないのか？」

妹へと問う。

春は幼い頃からよく熱を出し、学校を休む事が多い。体調不良が原因で休む事は構わないと真冬は思っている。問題なのは高熱であっても平静を装って学校に通ってしまう事である。真冬を心配させまいとしての行動なのだろうが、何も知らないという事の方が逆に真冬を不安にさせる。

そのためにしつこいと思われるかもしれないが毎朝、体調を確認しているのである。

「大丈夫だよ。前よりも丈夫になったんだから」

問われた妹はどこかぎこちない笑みを浮かべた。こういう反応を見せる時の春は信用ならない。

（どうして正直に言わないかな）

真冬は心の中でつぶやく。内心では少し怒っている。体調が悪いのであれば頼ってほしいのである。その頻度が明らかに多いのである。

つても真冬は気にしないのだから。

「確認するぞ」

掴んだ腕をさらに引いて春を引き寄せる。そして、春の細い右肩に自らの右手を置いて抱き寄せ、額を近づけていく。

触れた額が感じたのは確かな熱。微熱といった所だろうか。

「これくらい……何ともないんだよ。真冬は心配し過ぎだって」

春はどこか戸惑っている様子だった。熱のせいでほんのりと赤みを増した頬は、さらに赤くなっているように見えるのは気のせいだろうか。いや、毎日顔を見ている真冬には照れのせいで赤らんでいるのだとはつきりと分かってしまう。

理由は、いつもは額に手を添えるだけだが、今日は額同士を触れさせたためだろう。真冬の突然の奇行に照れ視線を彷徨わせている春。

そんな妹が愛しくて、それでいて心配な真冬は――

「俺はどれだけお前が大きくなっても心配するさ」

優しく語り掛けると共に柔らかな黒髪を撫でていく。

「ありがと」

春はうつむいて大人しく髪を撫でさせてくれた。叶うのであればずっと撫でていたいと思えるサラサラで心地いい髪。真冬の心には至福の想いが溢れていく。

だが。

それと共に感じるのは鋭い痛み。そして、寂しさだった。

至福の想いと、痛み。なぜそのような相反する想いが胸を掠めるのか。その理由を想像する事は容易である。

（妹なんだよな）

真冬は自らに言い聞かせるように心中でつぶやく。そして、痛みから逃れるかのように髪を撫でていた手を引っ込めていく。

「あ……」

その瞬間に春は名残惜しそうな上目遣いの瞳を向けてくる。

（春はどう思っているのかな？）

妹の瞳を受け止めた真冬は一つの疑問が脳裏に浮かぶ。その疑問は決して口にはしていない疑問。この疑問を春にぶつけてしまえば二人の関係は崩れてしまっただろうから。

「着替えるよ」

真冬は止まらない想いを抑えるために早口でつぶやき背を向ける。その背に突き刺さったのは寂しげな瞳。振り返らずとも春がどんな表情を浮かべているかははっきりと想像する事が出来る。

きつと泣きそうな顔をしているのだろう。

「うん」

春は一つ頷くと共にか弱い声を掛けるだけだった。

*

春が部屋から出た後。

真冬はすぐさま高校指定の学ランタイプの制服をハンガーから外していく。

（時間を掛け過ぎたな）

真冬は自嘲的な笑みを浮かべ、机の上に置いてある時計を見つめる。

現在の時刻は七時四十分。

二人が生活している学生寮から、冬月ふゆつき高校までは早足で歩いて約五分である。猶予はまだあるがゆっくりしていられる時間はないだろう。

真冬は遅刻をしても構わないが、春まで巻き添えにする訳にはいかないのである。言って聞くタイプではない春は真冬が何を言おうともその場を離れる事はないだろう。結果、春を遅刻させないためには急ぐしか他に道はないのである。

（これでいい。後は歩きながら）

Tシャツの上から制服を羽織り、肩に手提げバッグを引っかけて部屋を飛び出す。

「そう焦らなくても」

六畳部屋の中心にある丸テーブルに突っ伏していた春が顔を上げて苦笑いを浮かべる。真冬も自らの慌てぶりには若干、苦笑してしまふ。

だが、冬月高校において遅刻をするという事は致命的なのである。一昔前のように教師に怒られるだけなら聞き流せばいいが、もっと物理的な損失があるのである。

「遅刻すると春のポイントまで下がるからな」

真冬は羽織った制服のボタンを閉じながらつぶやく。

「そんな事、真冬が気にしなくていいのに」

春は一度肩をすくめて立ち上がる。その手に持っているのは一つのカード。

春が持っているカードは冬月高校が生徒を管理するために用意した物である。出席の登録、寮のドアロック、物品の貸し出し等に使用する生活には欠かせない道具である。ポイントが減少すれば各施設の使用制限、反省文の提出、学費の割増、最悪は寮からの強制退去など様々な罰則が与えられ学生の死活問題に直結しているのだ。

当然、真冬もカードを持っており、常にポイントを気にしながらの生活である。

「登録つと」

春がつぶやいてドア横にある真四角の認証機へとカードを通していく。

「織部春、七時四十二分に登録。問題なし」

認証機が機械音声を発して部屋のドアロックを解除する。

真冬もそれに倣い認証機へとカードを通す。同じような機械音声が出るまでは先ほどと同じ。唯一違う所と言えば部屋の照明が自動的に消えた事くらいだろうか。

「こういう所は便利だね」

春が認証機を優しく撫でる。

全てカードで制御されているために電気の消し忘れという事はな

く、そして部屋の住民である二人が外に出れば鍵は自動的にロックされる。つまりっかり鍵を閉め忘れたなどという失敗をする事はないのである。

（管理されているのは不満なんだけどな）

春の言うとおり便利ではある。だが、その反面カードによって管理されている学生達。不満がないと言えは嘘にはなるが、同時に何もいかがわしい事をしていなければ恩恵を受ける事の方が多いのも事実ではある。そのため時折感じる不満を直接口に出す者はいないというのが現状である。

「授業開始まで残り十五分です。授業開始まで——」

機械音声がのんびりとした学生へと最後の押しをかけていく。

催促の音声を聞いた生徒達はどこか慌てた様子で無機質なコンクリートで出来た道を早足で歩む。それが当たり前前の日常だと言わんばかりに。その集団と一定の距離を置いて二人は学生の一部として自然に溶け込んでいく。

「寒くないか？」

無事に集団に紛れる事に成功した真冬は安堵の息を吐いて隣にいる妹へと声を掛ける。

「大丈夫だよ。まだ雪月ゆきつきに入ったばかりなんだから」

声を掛けられた春は自らの万全さを示すかのようにクルリと一回転して微笑む。見た所寒くて震えているという事はなさそうである。むしろ元気が有り余っているという様子である。これで熱っぽいというのだから本当に不思議で仕方ない。

「もう雪月なんだよな。まだ対して寒くはないけれど」

春の言葉を聞いて空を見上げる真冬。左右に立ち並ぶ木々はすでに葉を落とし、枯れ果ててはいるが凍てついた寒さは感じない。これから寒さの本番という事なのだろう。

真冬たちが住んでいる常月ときづきという島国は四季がはっきりと分かれている。現在は雪月と呼ばれる季節であり、文字通り雪が舞う季節である。

国名は常月、そして地域と高校の名前は冬月、最終的には季節に
も月という漢字を使用するのは過去に月を神聖なものとして崇拜し
ていたためだと聞いている。現在ではその事実が風化してしまい実
際の理由はもはや誰も知らないというのが現状である。真冬自身も
名前の由来など特に気にする事はないために頭の片隅に置いている
程度である。

それよりも大切なのは妹の体調なのである。

「寒ければ言えよ」

真冬は妹の様子を確認しながらつぶやく。ここまでくるとさすが
に過保護が過ぎるような気もするが心配だと思っ心は止められなか
った。その想いに理由を求める事はもはや意味を成さない。仮に毛
嫌いされようと真冬は妹が心配で堪らないのである。

「うん。寒いと思ったらすぐに真冬にくつつくよ。雪月は身を寄せ
ても恥ずかしくないから好きかな」

頬を真っ赤に染めて見つめてくる春。

身を寄せ合っていても「寒いから」と言えば場を流せる季節。だ
が、恥ずかしくないかと問われれば真冬は恥ずかしい。それでも春
の温もりを多く感じられるこの季節は真冬も好きだった。

「寒い時だけだぞ。恥ずかしいんだからな」

真冬は心の中は語らずに、おそらく一般的な兄が言う様な模範解
答をつぶやく。一度、針で突かれたように心が痛む。春に隠し事を
した後ろめたさだろうか。それかまた別の理由なのかもしれない。
もやもやした心境を抱えながらも言葉を掛けた相手へと視線を向け
る真冬。

「仕方ないな。でも、真冬は寒いのが苦手だから僕が温めてあげる
からね」

春はこちらの心境を理解しているのかは分からないが、まだ諦め
た様子はない。今すぐにでも腕を取って歩き出しそんな雰囲気すら
感じてしまう。

そんな姿に一度苦笑した真冬は――

「俺が寒いから温めている、という事にしておくか」

春の思うようにさせてあげる事にした。拒む事など真冬には決して出来ないのだから。

「任せてよ」

つぶやいた春の笑顔はまるで花が咲いたように綺麗だった。叶うのであればずっと見ていたと思えるような温かく、それでいて優しい笑顔。

（俺はこの笑顔を守りたいんだ。両親の代わりに）

真冬は胸に浮かんだ想いを心の中で噛みしめる。それと共に何か春に言葉を返そうと思いを走らせていく。

「あ！　そういえば昨日は夢を見たの？」

歩道を一分ほど歩いた所で春が思い出したように口を開く。春の質問は「昨日は何か夢を見たの？」というような話題を展開するための興味本位の質問ではない。

真冬はある夢を頻繁に見るのである。見始めた頃は特に気にもしなかった夢ではあるのだが、その夢がまるで自らが体験をしたように生々しく、それでいてその夢に登場する人物があまりにも真冬自らに似ているために放置出来なくなってしまったのである。

そして、その夢には春に似た少女も登場する事から一度春に確認をしたのをきっかけに、今もこうして問われる事があるのである。

「ああ、見たよ。袴を着た俺が見た事もない化け物と戦う夢をね。特に今回の夢は冗談が過ぎる」

真冬は一度溜息をつく。

それと同時に震えた瞳を春へと向ける。迷いに満ちた真冬の瞳を受け取った春は真摯な瞳を返すと共に一つ頷く。話してほしいという事だろう。

春は自分に似た人物が化け物と戦うなどという突拍子もない話をいつも真剣に聞いてくれる。疑う所か、逆に一字一句聞き漏らさない様に常に真剣に。

だからこそ真冬は話し続ける事が出来た。どんな内容であっても。

「春に似た少女が化け物に殺されそうになる夢だった。それなのに俺に似た少年は無力で助けられなくて……」

真冬は震えながら語る。

実際に体験したのは真冬ではない。夢の中の少年である。だが、この胸に抱く喪失感の本物だった。春には言っていないがこの夢を見て飛び起きたのは午前二時くらいの話である。その後は喪失感に全身を震わせながら夜を過ごし、ようやく眠れたのが午前六時の事だった。

再び瞳を開けて春を見た時の安堵感、そして脱力感は言葉では言い表せないだろう。

「そう。大丈夫だよ……僕は生きてるから。それに死んだりなんかしないよ」

春が心を洗う様な温かな笑みを浮かべたのは一瞬だった。次にはどこか真剣な瞳を前方へと向ける。その視線を追った先にいたのは腰まで伸びた長い黒髪が目印の少女。

真冬と同じクラスの雨月雫だった。雨月神社の一人娘らしくどこか神聖で凜とした印象を受けるが、話してみれば刺々しさは微塵もなく草食動物のように大人しい少女である。

（彼女もまた夢の中の登場人物に似ている）

真冬はクラスメイトの背中を見つめる。彼女によく似た少女がなぜか夢の中に出てくるのである。真冬は雨月雫に何か特別な想いを抱いているのではないか。そう思う時もある。だが、今年に入ってから初めて顔を合わせた少女であり、そもそも会話した事も数回しかない。この胸の中に特別な感情があるとは到底思えなかった。

そして、真冬は彼女を知る前から夢の中で彼女に似た少女を見ている。その事実が真冬をさらなる恐怖へと叩き落とすのである。答えの分からない未知なる恐怖。ただの夢であればそれでもいい。だが、違うのであれば一体何を示しているのか知れたかった。

「真冬。現実を見て」

恐怖で震える真冬へと妹は手を伸ばす。温かな手が真冬の手を包

み込む。

その瞬間に真冬は現実へと引き戻される。

「あれはただの夢なんだよな。あれが現実だったら体を張ってでも春を守る筈だ。あれは俺ではない。違うんだ」

真冬は頭を振って妹の手をしっかりと握り返す。

「僕のせいで真冬が死んだら嫌だよ」

「言っただろう。親の代わりにずっと春を守るって」

うつむく妹へと真冬は遠い日の約束を語る。

それは仕事で家に戻る事がなかった両親の死を知らされたある日の事。泣き続ける春に真冬がした約束だった。今でもなぜ両親が亡くなったのかは知らされていない。話す事が躊躇われるような事に手を染めていたのか、それとも原因不明の事故にでも巻き込まれたのか。

死因を知る事は叶わなかったが、今となっては側にいない両親などとは真冬には関係がない。自らが春を守ればいいのだから。この命に掛けて。その決意が揺らぐ事などありはしないと思っている。何があるうとも。

「どこにいるのかも教えずに……拳句には勝手に死んだ両親なんかさっさと忘れる。親が必要なら……俺が代わりにずっと春を守るから」

春が真冬を見つめてつぶやく。それは幼い日に真冬が春に掛けた言葉だった。一字一句間違っではないだろう。それだけ春にとってもこの約束は印象的だったのだろうか。仮にそうであるならば約束した真冬は救われたような気がする。自らの生き方は間違っていなかったのだと強く想う事が出来た瞬間だった。

「全部、覚えていなくても」

真冬はまるで火傷したかのような熱さを頬に感じる。そんな様子が可笑しいのか春は腹を抱えて笑い出す。

（こんな現実は無言無言。あんな訳の分からない化け物なんかに）
真冬は楽しそうに笑う春を見つめて思う。

もしあの夢が現実にかかる事を予期したものであるならば奪われる訳にはいかないのである。約束を守るために。そして、溢れる想いを貫くためにも。

「絶対に忘れないよ。だから、ずっと側にいてね」

笑い終えた春がもう一度手を握り返す。春の手から伝わったのは温かい気持ち。

「ああ。ずっとだ」

その気持ちに応えるように真冬は春の髪を優しく撫でた。

第一話 後編

— 後編 —

春と校舎の一階で別れた真冬は自らの教室がある二階に向けて足を向ける。冬月高校は学年が上がる度に階が上がるという仕組みなのである。

特に見知った顔はなく淡々と階段を上っていく真冬。そして階段を上り終え、左へと進路を取る。あとはただ真つ直ぐ進むだけである。

そして、自らの教室である「2―C」という標識を見つめた瞬間に、ふと背後に人が立ったような気がする。

それは勘違いなどではなく、陽気な声と共に鋭い痛みが左肩を駆け抜けていく。

「朝から見せつけてくれたなあ」

瞬時に肩を叩かれたのだと判断した真冬はうつとうしそうな瞳を背後へと向ける。

背後に立っていたのは予想通り真つ赤な髪を肩まで伸ばした陽気そうな印象の男だった。真冬の友達、もとい仲の良い顔見知りの一人である藤堂久隆とうどうひさたかであった。

「やはりお前か」

溜息混じりにつぶやく真冬。登校中に気づいているのであれば声を掛ければいいものかと思えて仕方がない。彼なりに気にしたとでもいうのだろうか。

「春ちゃん、どんどん可愛くなっているよなあ。贅沢を言うならもう少し体が成長すれ——グボエ」

最後まで言い切る前に、真冬の肘が藤堂の腹部へとめり込む。渾身の一撃を受けた藤堂の体がくの字に折り曲がったのは一瞬の事で、すぐに仰向けに倒れていく。もはや昇天でもしそうな様子ではある

が真冬は手加減しない。

「次、春にそんな卑猥な視線を向けたら——消す」

まるで獣を見るような瞳で仲の良い顔見知りを見下ろす真冬。

「ちよっ——冗談だつて」

さらなる追撃を恐れた藤堂は引きつった笑みを浮かべて真冬を見上げる。実際に考えを改めないようならば腹部を踏みつけるつもりだった真冬は、仲の良い顔見知りの声を聞いて我に返る。こんな所で獣一匹踏み殺しても仕方がないのである。

「ならいい」

真冬は短くつぶやいて自らの教室を目指していく。

その瞬間に、まるで見計らったように予鈴のチャイムが鳴り響く。

「ぐ……動けねえ。本当に春ちゃんが関わると冗談が通じねえ」

真冬の背へと掛けられた藤堂の何気ない一言。何の悪気もなく、特に意味もない言葉。

（分かつてるよ。春は妹なんだ）

だが、そんな些細な言葉で真冬の心は揺れていた。本当に軟弱な心だと思えてならない。こんなに大切に思っているのであれば堂々としていればいいのである。振り向いて「俺は妹が大切で、大好きなんだ！」と叫べばいいだけだというのに。

そんな簡単な事が今の真冬には出来なかった。

*

「また再び……この冬の地を選ぶか。これも運命かな」

涼やかな声が響く。

声が響いた瞬間に枯れた木々に止まり羽を休めていた鳥達が一斉に飛び立つ。そんな様子を感情のない真紅の瞳で見つめた少女は一つ溜息をつく。

（何度、あの魂を……あの男の心をへし折ればいいのだろうか）

少女はゆっくりと右手を掲げる。

刹那、一つの門が開く。

その先に写っているのは黒髪の少年。あまりにも見続けてきたために見飽きてしまった少年がそこにはいた。

だが、彼は自らが知っている少年ではない。自らが心をへし折り、地へとねじ伏せた少年の生まれ変わり。そして、今回も同じように地へとねじ伏せる。

全てはこの世界のために。この世界を正しい形へと保つために。ただそのためにだけに自らは存在するのである。

「我は監視者。これは世界が望んだ答え」

監視者は感情のない言葉を吐いて歪に歪んだ門へと手を入れる。

その瞬間に世界が変わる。生命も、有機物も、無機物も存在しない虚無の世界へと。監視者はこの力を扱える事が、世界が自らを受け入れてくれている証拠だと信じている。

だから迷わなかった。ただ淡々と成すべき事を、平然と成す事が出来るのだった。

この虚無の世界に立ち尽くしているのは監視者と、救いのない話に付き合わせる哀れな少年だけ。その少年に真紅の瞳を向けた監視者はゆっくりと口を開く。始まりを告げるために。

「ようこそ、織部真冬。この悲しき世界に」

監視者は恭しく礼をする。自らが心をへし折るであろう相手へと最大限の礼儀を尽くすために。

「ここは——どこだ？」

真冬は何もない真っ暗な世界を見渡してつぶやく。

（やはり同じなのだな）

監視者は前世と全く同じ反応を見せた彼を見つめて薄っすらと微笑む。彼は特別な存在ではない。ただの十七歳の少年なのである。だからこそ選んだ少年だった。

容易に心をへし折る事が出来るから。そして、好きなタイミングで地へとねじ伏せる事が出来るのだから。まるで赤子の手を捻るかのよう。

「問いに答える必要があるのか？ 分かっているのではないのか？」
監視者は彼にせめての情けをかける。なぜこんな事をつぶやいてしまったのかは分からなかった。もしかすれば彼に対して何かしらの罪悪感でもあるというのだろうか。仮にそうであるならばまだ自らにも人間らしい感情が残っていたという事かもしれない。今さらそんな事が分かったとしてもどうしようもないのだが。

「あの夢の事か！ 何か知っているのか！ 春はどうなる！」

真冬はまるで獣のように監視者に向けて浮かんだ言葉を叫び続ける。それはあまりにも稚拙で、対話の価値すら感じさせない。

だが、招いたのは他ならぬ監視者。必要な事だけは語るべきだろう。それが意味のない事であっても。

「さてな。問えば全て答えてもらえるとは思わない事だ。それでは続きを見るがいい。前世のお前が見た……絶望を。そして感じるがいい。貴様は運命に、輪廻の鎖に縛られているのだという事を」

監視者は必要最低限の言葉をつぶやく。これ以上、語るつもりはない。わざわざ敵に情報を渡した所でこちらには何の利益はないのだから。

「待て！」

真冬は手を伸ばす。そんな彼へと背を向けた監視者は元来た場所へと戻っていく。

「いい夢を見れるといいな。織部真冬」

決していい夢など見られる訳はない。それは監視者自身が一番良く知っているが、それでもせめてもの慰めは必要だと思って述べた言葉だった。

（まるで人間だな）

監視者は薄い笑みを浮かべて虚無の世界から、その姿を消した。

*

黒いローブを纏った真紅の瞳の少女が去り、この何もない真っ暗

な空間に取り残されたのは真冬だけだった。

（あの瞳は？）

あの真紅の瞳はどこかで見た覚えがあるのである。現実には赤い瞳などは存在しない。という事は人ではない何かの瞳だったのだろうか。「あの化け物か？」

真冬は自らが見続けた夢を思い出す。姿形はバラバラだったが、真紅の瞳をしていた事ははっきりと覚えている。

まるで鮮血のように赤く、それでいて不気味な瞳。あの瞳と少女の瞳は一緒だったのである。という事は、彼女はあの化け物の仲間だというのだろうか。

（あの少女は俺に何を伝えたい。何がしたい）

真冬は一人で頭を抱える。

だが、答えなど出る訳もない。心を埋めたのは恐怖と、理不尽な出来事に対する怒りだけだった。

「また見せるんだろう？ だったら早くしろ」

真冬は鋭い瞳を前方へと向けて吐き捨てるようにつぶやく。

刹那。

真冬のつぶやきに応えるように溢れ出した光が真冬を包み込む。

これはいつもの夢の始まりに訪れる瞬間。

だが、光を受け止める真冬は今までとは違った。夢を自らの意思で見、そして何かを掴み取るうする心が確かにそこにはあるのだから。

数瞬の間を置いて溢れた光が徐々に収まっていく。

視界を確保した真冬の瞳に飛び込んできたのは、大木に背を預けた一人の少年だった。その姿は真冬と瓜二つ。唯一の違いと言えば彼が袴を着ている事くらいだろうか。真冬は袴などを普段から着るような事はないのだから。

「守れなかった」

うつむいたまま少年がつぶやく。頬に伝っていたのは一つの涙。彼から伝わってくるのは喪失感、絶望、後悔、自らの無力さに対する

る怒りだった。

（なんだよ。この痛みは）

真冬は自らの心に流れ込んでくる感情を堰き止めるように胸を強く押さえる。だが、流れ込む感情は止まらなかった。身を引き裂くような痛みは全身を駆け巡り、身に宿る全ての力を奪い去っていく。真冬が気づいた時には虚無の空間に無様に膝をついていた。

「俺のせいで……は」

少年がつぶやく。彼の声は良くは聞こえなかったが、おそらく少年の妹の名前をつぶやいたのだろう。そして、先ほど感じた痛みは、彼が感じた痛みなのだと瞬時に理解していく。

これが前世の自分だともいうのだろうか。これだけの痛みを受けて彼は一体どうしたというのだろう。答えを求めて真冬は再び彼へと視線を向ける。

「行かないと」

少年は折れた刀を支えにして立ち上がる。だが、瞳には光は宿っていない。立っている事すらもやっとだというのに強く刀を握り締め一歩、また一歩と進んでいく。それはまさに壊れた人形のようなだった。

真冬は言葉を発する事が出来ない。これを自らが経験するというのだろうか。こんな残酷な運命に縛られているとも言っのだろうか。

あれは自分ではない。そう言い聞かせるが心は落ち着く事はない。むしろ前世の彼と同じように自らの心が壊れていく様をはつきりと感じる事が出来る。

（痛い）

心の中で何かが軋む音が響く。それは心が壊れていく音だったのかもしれない。

（これで終わるのか？）

真冬の心を絶望が満たす。抗いたいと思うが、その術が見つからなかった。瞳を閉じて痛みは止めどなく流れてくるのだから。

そんな真冬を救ったのは聞き慣れた声だった。

「真冬！ 真冬！」

それは自らの名を呼ぶ春の声。真冬が守ると約束した少女の声だった。

（こんな所で勝手に壊れたらいけないよな）

真冬は再び全身に力を込めて立ち上がる。向かう先はすでに決まっているのだから。

「真冬！」

春の叫び声。その声に向けて真冬は震える手を伸ばしていく。触れたのはいつもの温もりだった。決して離したくない温もり。

真冬が求める唯一の救いがそこにはあった。

「俺はまだ失っていない」

確かな温もりを離さぬようにしっかりと握り絞めて真冬はつぶやく。

「だから行くよ。俺は春を失いたくないから」

真冬は決意に満ちた瞳を前方へと向けて歩み出す。道に迷う事はなかった。真冬が帰るべき場所ははっきりと分かっているから。仮に迷ったとしても春が真冬を導いてくれるから。

光が真つ暗な空間を満たす。

溢れる光を全身に受け止めた真冬はゆっくりと瞳を開く。

「真冬。寝すぎだよ……心配したんだから」

瞳を開けた先には真冬を心配そうに眺める春がいた。場所は真冬の教室。毎日、腰を下ろす窓際の席であった。授業を受けている時に急にあの空間に導かれたのだから当然といえば当然だろう。

（帰ってこられたみたいだな）

真冬は安堵の息を吐いて、再び妹を見つめる。春がいなければ帰って来られたとしても無事ではなかったかもしれない。あの場で心を碎かれて、あの少女の描いたシナリオ通りに進んでいた事だろう。

「真冬？」

「長い夢を見ていたんだ。とっても残酷な」

心配する妹に向けて真冬は努めて明るくつぶやく。心の内を悟られたくはない。今はどんな事でも話してしまいそうだから。

「そうなんだ。もう隠しておけないのかな」

真冬の言葉を聞いた春はか細い声を発する。春の黒い瞳に浮かんでいるのは明らかな迷いだっただ。

「何か知っているのか！」

真冬は勢いよく立ち上がり妹の肩を強く掴む。周りが奇異の視線を向けるが構ってなどいらなかった。もう何も知らないままではいられないから。踏み込む事であの化け物と戦う事になるにしても、春を守るのなら構わない。

「何も知らないよ。嫌だなあ」

真冬は真剣な瞳を向けるが、春はぎこちない笑みを浮かべるだけだった。だが、明らかに何かを隠しているであろう事は真冬にも分かった。話す事が出来ない理由があるのか、それが話すつもりがなのか。それは分からないが、このままにするつもりは真冬にはない。

（話す気がないなら確かめるだけだ）

真冬は密かに決意して細い肩からゆっくりと手を離す。

「もう。寝るのはいいけれど寝ぼけないでね。もうお昼の時間なんだから。恥ずかしい」

春が場を誤魔化すために手作りの弁当を手提げバックから取り出すと共に押し付けてくる。

「一時間くらい寝てたからな」

クラスメイトの一人が真冬を見て笑う。その瞬間にクラス中が笑いで満たされていく。

「はは……すまない」

真冬は理由もなく一つ謝り、この場は笑って誤魔化す。そして、こっそりと春を盗み見る。

春は胸の前で拳を握り、まるで助けを求めるかのような瞳をとある人物に向けている。その瞳の先は確かめなくても分かる。

（雨月雫か。彼女も春も何かを知っている。俺は——もうこのまま止まっではられない）

強く拳を握って真冬は心中で決意する。真相を確かめて、あの化け物と同じ瞳をした少女に抗い続けると。

その先にあるのは心が折れた少年とは違う未来が広がっている事を切に願った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3249ba/>

輪廻の鎖 改訂版

2012年1月10日11時48分発行